

歴史系博物館における「未来」の表象

金子 淳

キーワード：博物館、展示表象、未来予測、歴史学

1 歴史と未来

SF小説の大家、アイザック・アシモフの作品「ファウンデーションシリーズ（銀河帝国興亡史）」には、「心理歴史学（psychohistory）」という架空の学問分野が登場する¹。「心理歴史学」においては、人間の歴史は十分な人口があれば確率論的に計算することができ、人類の未来も数学的に予測することができるという。こうした確率論的な未来予測がこの作品の根幹をなす。

もちろんこれはアシモフによって考案されたフィクションであるが、物語の主軸を構成する新学問の名称に、未来予測とは一見相容れないような「歴史学」の語を与えたことにその妙味があった。こうしてアシモフは、「心理歴史学」を舞台装置の一つとして、数万年後の「未来」における壮大な銀河帝国の「歴史」を描き出すのである。

もともと、歴史と未来の取り合わせは、実際のところ「妙味」とはいいがたい。「歴史学は過去を振り返ることで未来を見通す」といった類いの言明は、歴史学の意義やその有用性を説明する語り口として、もはや定番とさえいえる。

歴史学の名著として知られるエドワード・ハレット・カーの『歴史とは何か』における、「歴史とは現在と過去との対話である」というあまりにも有名な言葉は、何度となく引き合いに出され、もはや「陳腐な決まり文句」[塩川 2010: 20]とも評されるほどだが、実は同書中の後の箇所で、

歴史とは過去と現在との間の対話であると前の講演で申し上げたのですが、むしろ、歴史とは過去の諸事件と次第に現れてくる未来の諸目的との間の対話と呼ぶべきであったかと思えます。

と述べ²、過去と未来との対話と言い換えられている [カー 1962: 184]。すなわち、「未

来だけが、過去を解釈する鍵を与えてくれる」[カー 1962:182]として、歴史家が歴史上の出来事の中で重要なものとして選択し秩序を与える際の基準として、「未来」という時制を持ち出してくるのである。そして、「歴史が過去と未来との間に一貫した関係を打ち樹てる時にのみ、歴史は意味と客観性を持つことになる」[カー 1962:194]と、未来との対話により客観性の獲得も可能となるとも主張し、過去と未来の強力な関係性を示唆した。「未来志向の歴史学」[塩川 2007:225-226]とも称される所以である。

このことに関して歴史学者のデヴィッド・キャナダインは、カーが『歴史とは何か』を著した1960年代は、歴史学に「現在を理解するどころか、未来を変えたりする助けになるという信念があった」と指摘したが[キャナダイン 2005:iii]、こうしたカーの著作がいまだに繰り返し引き合いに出され、力を持っているように見えるのは、歴史学が何らかの形で未来とつながるものだという認識が、歴史学の有用性を主張するためのレトリックを超えて、ある種の規範を伴いながら共有されているからだろう。つまり、歴史と未来は、単に現在をはさんで時間軸上の前と後ろという層序的な重なりというだけでは済まされない、歴史学という学問的営為の根本にまで関わるような特別な意味合いを含んでいるのである。

この両者の結びつきがより端的にあらわれる場が、博物館における展示である。歴史学の成果を、研究者集団にとどまらせることなく、より広く一般の観覧に供するためのメディアとして博物館展示が機能していると考えれば、こうした歴史学における未来表象のエッセンスが、より凝縮した形であらわされていると考えられる。

そこで本稿では、歴史を描く際の未来の取り上げ方に注目し、主に歴史系博物館における展示を例に、どのように未来が表象され、そこにどのような課題を見出せるのかを検討していきたい。

2 博物館における「未来」とその周辺

(1) 館名から見る「未来」

博物館と未来との結びつきは、展示だけではなくその名称にもあらわれている。館種を問わなければ、館名に「未来」「みらい」が含まれる施設が意外と多い。そのネーミングは必ずしも展示内容と結びついているとは言えない場合もあるが、「未来」という言葉に託した何らかの意図が反映されているともいえる。

後述するように、この傾向は科学技術や産業を扱う理工系博物館に比較的多く認められ、日本科学未来館(2001年開館、東京都江東区)、東芝未来科学館(2014年開館、川崎市)、鉄の未来科学館(1990年開館、島根県雲南市)、人と科学の未来館サイピア(2013年開館、岡山市)などが該当する。「科学技術を文化として捉え、私たちの社会に対する役割と未来の可能性について考え、語り合う」という日本科学未来館の「設立の趣旨」において典型的に示

されている通り、科学技術の未来を展望する意味合いを込めて名付けられたものと考えられる。

また、「未来を担う」というイメージに合致するのか、こども未来創造館（2013年開館、東京都足立区）、こども未来館ここにこ（2008年開館、愛知県豊橋市）、富山県こどもみらい館（1992年開館、富山県射水市）、佐久市子ども未来館（2001年開館、長野県佐久市）などのような、子どもを対象とした施設においても未来は多用される（子ども=未来という図式については後に詳述する）。ただし、これらは必ずしも博物館のカテゴリーに入るかどうかは一定せず、児童館との境界領域にある場合もあるため、留意が必要である。

未来は「環境」とも親和的で、四日市公害と環境未来館（2015年開館、三重県四日市市）、かごしま環境未来館（2008年開館、鹿児島市）、こうべ環境未来館（2004年開館、神戸市）という館名も見られる。「公害」を克服し、より積極的に「環境」という語に言い換えられた時〔金子 2011〕、未来のイメージが引き寄せられてくるのかもしれない。

「歴史」と未来という取り合わせでは、村田町歴史みらい館（1994年開館、宮城県村田町）、人と防災未来センター（2002年開館、神戸市）、未来の森ミュージアム（1991年開館、熊本県八代市）、山岳集古未来館（2015年開館、富山県立山町）といった施設もある。とりわけ未来の森ミュージアムでは、来館者向けパンフレットに「未来への扉」という項目を設け、「過去からのメッセージを生き生きと伝え、未来を切り拓く創造の場となる、そんな博物館を目指しています」と、館としての展示方針を表明しているが、ここでは未来へとつながる「歴史」が明確に意識されている³。

（2）展示の中の「未来」

次に展示内容に目を向けると、まず、理工系博物館の展示においてより積極的に未来への言及が散見される。科学技術の発達と未来社会とがほぼ同義に扱われ、科学技術があたかもバラ色の未来を作り出すといった語り口が一般的である。

館名に「未来」を冠する東芝未来科学館の常設展示では、「エネルギーの未来へ」「まちの未来へ」「ビルの未来へ」「家の未来へ」「ヘルスケアの未来へ」「じょうほう^(マ)の未来へ」というコーナーからなる「フューチャーゾーン」がある。東芝の創業者である田中久重と藤岡市助の生涯や歴代の東芝製品を展示する「ヒストリーゾーン」とは対照的に、「フューチャーゾーン」では、科学技術によって切り開かれる輝かしい未来を、ひたすら華やかに描き出す。

科学技術館（1964年開館、東京都千代田区）においても、未来をテーマに据えた展示が目白押しである。たとえば「NEDO - Future Scope ～未来の社会を発見しよう！～」という展示ブースでは、最先端の技術が息づく未来の私たちの街を体感する「スマートコミュニティ」、未来の街で活躍するロボットと交流できる「ロボットタウン」、地球と私たちの未来のために必要とされている再生可能エネルギーや新エネルギーを紹介する「エネ

ギーシティ」などのコーナーがある。「フューチャースタジオ」で上映される3Dハイビジョン映像の主人公は「MIRAI君」というロボットである。

同様に、TEPIA 先端技術館（2008年開館、東京都港区）では、「未来の暮らし」「未来の社会」というコーナーがあり、対話ロボットや有機EL照明、顔画像脈拍計測技術など、先端技術に基づくさまざまな展示物が並ぶ。そもそもTEPIA 先端技術館自体、「私たちの社会や経済を支え豊かにする様々な分野の先端技術を集め、次代を担う若者から一般の方々まで、いつでも、それらを間近で見たり、触ったり、動かしたりして、先端技術を楽しく身近なものとして体感できる、新しいスタイルの展示施設です」[TEPIA 先端技術館 2015]と説明されている通り、さまざまな企業や団体が出展する形で展示を構成する見本市のような形態をとっているため、未来へのスタンスは明快である。

以上のような理工系博物館においては、いわばSF的なユートピア思想が透けて見える。科学技術が発展すると何もかも便利になって夢のような生活が実現するという素朴な未来観は、実際のところ単なるファンタジーでしかないが、一方で、美術館においては、その未来社会のファンタジーそのものを批評の対象として扱っているのも興味深い。

館名に未来が付き、未来そのものが中心的な主題となっている美術館は存在しないが、特別展・企画展でしばしば未来が扱われる。森美術館（2003年開館、東京都港区）において2011年9月から翌年1月まで開催された「メタボリズムの未来都市展～戦後日本・今蘇る復興の夢とビジョン～」は、1960年代に建築界を席卷した建築運動「メタボリズム」につどった建築家たちが、どのような未来の都市像を描いていたかということに焦点を当てた展示だった。つまり、1960年代時点における未来予測に照準を合わせ、いわゆる「過去の時制における未来」を扱っているのである。

同様の観点から、弥生美術館（1984年開館、東京都文京区）の特別展「昭和少年SF大図鑑展～S20～40'ぼくたちの未来予想図～」(2009年7月～9月)においても見出せる。戦後復興期から高度経済成長期にかけて発行された少年少女雑誌における未来予想図や空想科学特集を展示し、当時の画家や漫画家たちが描き出した空想科学の世界を取り上げた。これらは過去における未来像を懐古趣味的に享受する「レトロフューチャー」といえるものだが、展示においてこうしたレトロフューチャーを美的対象として鑑賞するという流れの中には、近未来の空想科学イラストで知られる画家・小松崎茂の展示なども位置づけられるだろう。

3 歴史系博物館における未来の表象

(1) 未来の「不在」

歴史系博物館も、理工系博物館と同様に、展示において「未来」と親密な関係にある。常設展のテーマに「未来」が含まれているケースも多く、たとえば八戸市博物館（1983年開館、青森県八戸市）の「よみがえる歴史・ひらけゆく未来」、一関市博物館（1997年開館、

岩手県一関市の「過去から未来への展望」、くにたち郷土文化館（1994年開館、東京都国立市）の「過去・現在・未来を結ぶ」、宮崎県総合博物館（1971年開館、宮崎市）の「宮崎を体験し、宮崎を探求し、宮崎の未来を考える」などはその典型例である。展示の主要なテーマとはなっていないとしても、設立の理念や広報の文面、ウェブサイト上のキャッチフレーズなどに「未来を知る」などといった主旨の文言を入れている例は枚挙に暇がないほどである。

展示コーナーの名称に「未来」を冠している場合もある。沖縄県立博物館（2007年開館、那覇市）の常設展は「沖縄の今、そして未来へ」というコーナーで締めくくられているし、鳥取市歴史博物館（2000年開館、鳥取市）の常設展の最後のコーナーは「未来へのちから」である。

しかし、理工系博物館の未来観と決定的に違うのは、歴史系のそれにおいては未来そのものを展示しているわけではないということである。後述する例外を除いては、いずれも時制は過去形で終わり⁴、理工系博物館のようにユートピア的な未来が具体的に明示されることもない。いわゆる普通の通史展示の締めくくりの際しておさまりが良く、かつ余韻を残せるような都合のいいスローガンとして「未来」という言葉が選択されているといった方が、実情としては近いのではないか。

そもそも多くの歴史系博物館の通史展示では、どの時代のどのトピックで締めくくるかについて、さまざまなバリエーションがあり一定していない。当該博物館の開館年を末尾とする年表で終わらせる場合もあれば、大きく引き伸ばした空撮写真パネルを展示する場合、四季折々の豊かな自然環境を綴った映像を上映する場合、市制〇〇周年記念誌・記念品などといった行政に関する物品を展示する場合、地域特有の地場産業の製品を展示する場合、近接過去の風俗を示す物品（給食やルーズソックス、メイド服等）を展示する場合など、通史展示の終わらせ方は多種多様であるが、概して未来までは射程に入っていないケースがほとんどである。

つまり、基本理念や展示テーマなどで未来を高らかに謳い、「歴史を知ることで未来が見通せる」というようなスローガンがあったとしても、展示内容としての未来は実のところ「不在」である。ただし、後述する歴史学における未来予測の問題とも関わるように、歴史叙述は過去の時制に属する範囲にとどめ、その先の未来像の構築はあくまでも来館者の判断に委ねるといふ、一種の「解釈の解放」[金子 2008:11]が目指されているとも考えられる。その場合には、意図的に「未来の不在」を志向していることになる。

(2) 子どもという「未来」

しかしながら、歴史展示の中で積極的に未来を取り上げている博物館もいくつか存在する。たとえば山梨県立博物館（2005年開館、山梨県笛吹市）の常設展示には「子どもたちが描く山梨の未来」というコーナーがあり、「わたしが思う未来の山梨」をテーマに、山梨県内の小中学生が描いた大量の絵画作品が展示されている。子どものイマジネーションが未来そのものを映し出しているという趣向なのだろう。

同館では、毎年数期に分けて山梨県内の小中学生から絵画を募集し、その応募作品を展示しているのだが、なるほど壁一面に所狭しと展示される絵画は圧巻である。同館のウェブサイトでは各期の展示作品の縮小版が閲覧できるようになっており、たとえば2014年度版の作品を紹介したページには、次のようなコメントが付されている⁵。

「^(ママ)どんどんきれいになっていく山梨」「何年経っても、何十年たっても、とつても便利になっても、きれいな富士山や湖の景色は変わらないでいてもらいたい」「誰もが快適に過ごすことができるところ」…小中学生の豊かな想像力で、郷土に対する思いや希望を描いてくれました。

ここからは、子どもの「思い」や「希望」を「豊かな創造力」によって描いたものがそのまま未来に直結するという、子どもを媒介とした未来観が垣間見える。先に触れたように、「将来を担う子ども＝未来」という図式は、子ども対象の施設においても顕著だったが、歴史展示の一環として未来を可視化するために、子どもを媒介にするという手法が使われているのである。

同様に、子どもを媒介に未来を描き出そうとする例が、狭山市立博物館（1991年開館、埼玉県狭山市）である。同館の常設展示の最後は「未来への展望」と名付けられたパネルで締めくくられ、その解説文には次のようなメッセージが書かれている。

未来への展望

展示を通して「狭山の歴史」と「それらをつくった人々」への知識と関心を持って頂ければ幸いです。

アケボノゾウが生息したはるかな昔から、わずかな人間がかろうじて生活のできるようになった原始時代までにはながい年月の経過がありました。

それ以後、入間川をはさむ狭山の地に生きた人々は、努力によって生活を築き、文化をうみ、そして、環境をつくってきました。

現在の狭山市のすがたはこれらの人々から私達への贈り物と云うことができます。

狭山の過去と現在を知り、未来に思いをはせる時、私達はなにを未来の狭山に贈ることが必要なのでしょうか。

常設展示の最後にある「子供のおそぶ壁画」は狭山の子供たちが、現在も、また未来にも幸せであるようにとの願いをこめて制作したものです。

このパネル自体は、常設展示室を出た外側の廊下に展示されているが、「子供のおそぶ壁画」は常設展示室内のまさしく終端に大きく掲げられている。おそらく「子供のおそぶ壁画」そのものを未来の象徴として機能させようとしているのだろう。ちなみに「子供のおそぶ壁画」は、竹馬や凧あげ、こま回しなどで遊んだり、野山を駆け回る子どもたちの

ようすをメルヘンチックかつノスタルジックに描写したもので、着物姿で遊ぶ子どもを描いていることから明治から昭和戦前期あたりの情景と推測される。

ここでも、純粹無垢な子どもの存在を未来のイメージと重ね合わせようとしていると考えられるが、なぜその子どもイメージが明治から昭和戦前期の着物姿なのかはよく分からない。現代の子どもはもはや純粹無垢ではないため、古きよき昔の日本のイメージをノスタルジックに流用することによって、子どもの無垢性を最大化しようとしたのかもしれない。いずれにしても、歴史展示において未来の表象が困難をきわめる中において、その一つの突破口として「将来を担う子ども」というイメージを利用するという戦略を認めることができる。

実は十数年前、筆者が東京郊外の小さな博物館で学芸員として働いていた時、ある展示の企画会議の場で同席していた展示業者の方から、「展示の最後はどうします？子どもの絵でも飾って、「未来に向けて」みたいなメッセージを付けておきますか？」と言われて絶句したことがあった。それは展示の企画会議の中で出てきたたくさんのアイデアの中の一つだったと思うが、展示の落としどころとして「子ども」を持ってくるのはおそらく常套手段だったのだろう。しかし、「子どもの絵でも」という表現にあらわれているように、子どもという存在が都合のいい手駒として使われているようで、妙に後味が悪かったことを覚えている。

では、なぜ子ども＝未来という図式が成立しやすいのだろうか。以前別稿で考察したように〔金子 2009〕、子どもという存在自体、あたかも無色透明で価値中立的であるかのようにみなされ、語られるからではないか。「子どもの健やかな発達」に疑義をはさむ人はきわめて稀であろうし、「子どもの夢」をあからさまに否定する人はおそらくどこにもいない。仮に立場や利害関係が違った場面があったとしても、「将来を担う子どものために」という名目がつけば、その点においてのみ同じ方向を向くことができる。つまり、子どもは「非政治的でニュートラルな存在」であり、「自然」や「みどり」と同じように、「左翼であれ右翼であれ、あるいは革新であれ保守であれ、すべての人々がそれを認め、そして受け入れる」〔中島 1999:55〕という特性を持つのである。常設展示の終わりに「自然」や「みどり」を象徴させるような大きなパネルや映像が使われることが多いのも同じ理由による。

子どもを媒介することで価値観の相違が目立たなくなるからこそ、「無難」な未来像を描き出しやすいと判断されるのだろう。しかし、そのように子どもという存在を利用することでしか成立しないような未来から、われわれは何を見出すのだろうか。

(3) 「意見の展示」というディストピア

未来を展示するもう一つの方法が、「意見の展示」とでもいうべきものである。これは、来館者の意見をコンピューターに入力するか紙に手書きしてボードに貼るなどして公開・共有され、それが展示の一部を構成するという仕組みのことである。このような展示手法

は「比較的新しい」とされているが[石村 2008:99]、確かに近年よく見かけるようになってきている。

たとえば、これは未来の展示ではないものの、2014年に開館した三重県総合博物館（三重県津市）では、常設展（基本展示）最後の「エピローグ」というコーナーにおいて、このシステムを取り入れている。メッセージをキーボードで入力するか、付箋紙に書き込んで大きなボードに貼ることで、それ自体を展示として機能させている。ディスプレイ上には過去の来館者が書き込んだメッセージがタイル状に表示され、あるいはボード上に付箋紙が貼り出され、それを来館者も読むことができる。

三重県総合博物館の場合は、展示の感想を書き込むようになっているが、それを未来へのメッセージに取り入れているのが、2015年に開館した四日市公舎と環境未来館である。常設展の最後のコーナー「環境先進都市四日市」の中に、「未来により豊かな環境を引き継ぐために」と題された巨大なスクリーンがあり、タッチセンサー式の入力端末でメッセージを入力すると、その巨大スクリーンに映し出される仕組みとなっている。また、小さな紙の札も用意されていて、それに手書きして壁のフックに掛けることもできる。メッセージを書くスペースの傍らには、「未来に豊かな環境を残すために あなたができること 未来に向けてのメッセージを書こう！」と書かれたパネルがあり、来館者の「未来に向けてのメッセージ」それ自体を展示にしようという試みであることが分かる。

しかし、入力されたメッセージの多くは、実見したところ、「へいわ」とか「幸せになりますように」などといった、七夕の短冊に書かれるような単純で抽象的な願いごとばかりであった。また、「一人ひとりが気を付けて…」といった類いの、そう書いた瞬間に自分自身の立場を問題の当事者から無意識のうちに外してしまう、どこか他人事のようなメッセージもいくつか見られた。

いたずらも多く、筆者が見学したときには（タイミングが悪かったのかもしれないが）小学生が好むような排泄物や男性生殖器の名前も目立った。パネルの下部にある「関係のないメッセージは書き込まないでください。関係のないメッセージを見つけた場合は、削除します」という注意書きが象徴しているように、このシステムを安定的に運用し続けることは難しいようにも思われた。

もちろん、博物館側はおそらくこのような事態は想定済みで、見回りや削除等のメンテナンスの体制も整っているのだろう。しかし、随時監視をして書き込みをチェックし、場合によっては削除するといった管理をしてまで、秩序を保たなければ成立しないような「未来」とは、いったい何だろうか。穿った見方をすれば、自分の「意見」を表明しようにも監視の目が行き届き、それらすべてが管理・統制されているようなディストピアとしての未来を、このシステム自体が逆説的に体現していると言えるのかもしれない。

なお、「特定のテーマについて来館者が自ら考え、選択し意思決定できる場として展示空間をデザインするアプローチ」を「フォーラム型展示」と呼び[櫻井 2015:44]、近年その必要性が強調されているが、このような「意見の展示」は、ともすれば「フォーラム型

展示」を表面的になぞるようなパッケージとなりかねない。「対話型」「インタラクティブ型」などという美名のもとで、どの博物館でも形式的にそのフォーマットが採用されるようになったとしたら、その未来の表象は非常に安易で一面的なものになっていくだろう。

4 未来の表象という困難

(1) アップデートされない未来

ここまで見てきたように、歴史展示における未来の表象は困難をきわめる。こうした未来表象の難しさについては、テーマパークの事例を迂回的に検討することによって、また別の側面から確認することができる。

テーマパークでは、「未来」をテーマにすると成功しないといわれる。たとえば、東京ディズニーランドのトゥモローランドは、その名の通り「未来の国」をテーマにしているが、開業以来ほとんどのアトラクションで変動のないウェスタンランドやアドベンチャーランドに比べると、人気の持続が難しく、頻繁にアトラクションを入れ替えている。

同一の敷地におけるアトラクションの変遷例として、エターナル・シー（1983～1984年）→マジックジャーニー（1985～1986年）→キャプテンEO（1987～1996年）→マイクロアドベンチャー！（1997～2010年）→キャプテンEO（2010～2014年）→スティッチ・エンカウンター（2015年～）、あるいは、マジックカーペット世界一周（1983～1985年）→アメリカン・ジャーニー（1986～1992年）→ビジョナリウム（1993～2002年）→バズ・ライトイヤーのアストロブラスター（2004年～）などが挙げられるが⁶、こうして見るといかに入れ替えが激しいかが分かる。これは、ビッグサンダーマウンテンや蒸気船マークトウェイン号などの人気アトラクションを擁し、アメリカ開拓時代の西部の町並みを再現したウェスタンランドや、ジャングルクルーズ、カリブの海賊が不動の人気を誇る、「冒険とロマンの世界」をテーマにしたアドベンチャーランドとは対照的であり、こうした傾向は各国のディズニーランドにおいても同様である〔有馬 2011: 120-144〕。

逆に言えば、ウェスタンランドやアドベンチャーランドのように、「古き良き過去」の持つ懐かしさに安心や興味が持てるからこそ、盤石の人気を維持することができるのだろう。

東京ディズニーランド以外でも、未来や宇宙をコンセプトとしたテーマパークは苦戦を強いられているケースが非常に多い。たとえば、「宇宙」をコンセプトとして福岡県北九州市の新日本製鉄（現・新日鉄住金）八幡製鉄所の遊休地に1990年にオープンしたスペースワールドは、2004年に351億円の累積損失を記録、翌2005年に民事再生手続きを申請し経営破綻する（営業は継続）〔『朝日新聞』2005年5月14日〕。また、香川県丸亀市に1991年に開園したレオマワールドも、開園当初こそ宇宙飛行や南極探検などが体験できるアトラクションが人気だったが、入園者の減少により2000年に閉園、2003年に民事再生法の適用を申請し破綻する（2004年に経営権譲渡のうえニューレオマワールドとして営業継続）〔『読売新聞』2003年8月21日〕。

未来をコンセプトにした場合、未来のイメージが時代とともに変化し、その変化に応じて常に最新の技術やテーマ性が求められるため、アップデートを繰り返さなければならなくなる。いわゆる「近未来的」なデザインの建築物があつという間に古臭く感じられるようになるというのは、経験的にもよくある話だろう。そのため、常に改装・更新をし続けなければ、必ずすぐに時代遅れになり、更新の歩みを止めるとそれはもはや未来ではなくなってしまう。あるいは、ある時点で未来のアップデートを停止させ、その状態で凍結保存のように維持することによって、「過去における未来像」としてレトロフューチャー的に提示せざるを得なくなる。

こうしたテーマパークの例は、博物館においても十分に当てはまる。すなわち、展示における未来表象の課題が、単に未来予測に基づく展示が可能かどうかというコンテンツに関わるだけでなく、こうした未来像のアップデートを永続的にしていくことが物理的・人的・財政的に可能かどうかという問題にまで波及するのである。仮にコンテンツの問題が解決したとしても、未来の展示を実現させるためには、過去の事象に関する展示とはまた別の現実的な制約が壁として立ちはだかることになるわけである。

(2) 歴史法則と未来予測

では、その未来表象というコンテンツの問題、すなわち歴史学において未来予測に基づいた展示が可能なのかという点について次に考えてみたい。そもそも歴史学において未来予測に関する問題はどのように捉えられていたのだろうか。先述のカーは、「未来に対する予言の問題」について次のように説明している [カー 1962:99]。

みなさんは、ある学校で二、三人の子供が麻疹にかかり始めたら、この伝染病が蔓延するであろうという結論を下すでしょうし、もしこれを予言とおっしゃりたいのなら、この予言は、過去の経験からの一般化に基づくものであり、行動にとって正当且つ有効な指針なのであります。しかし、みなさんは、麻疹にかかるのがチャールズかメアリかという個別的な予言はできないでしょう。歴史家も同じ道を進むものなのです。

ここでは、歴史上の出来事・事件に一般—特殊という軸を設定し、麻疹の罹患を例に、一般化できる事象に関しては予測可能との見解が示されている。2、3人の罹患という事実から導き出される一般化された結論として麻疹の蔓延は予測できるが、具体的に誰が麻疹にかかるかは特殊な事件に相当するため予測はできないというわけだ。つまり、一般化が可能であればその因果関係を突き止め、法則性を導き出すことができるし、未来予測も可能というのである（逆に、個別的な特殊事例の予測はできない）。

このような一般—特殊という軸は、新カント学派のヴィンデルバントが主張したような、いわゆる法則定立的 (nomothetic) 研究と個性記述的 (idiographic) 研究という方法論的な区分を想起させるが、こうして法則定立的な科学と歴史学との親和性を強調し、法則

性の探求という点で歴史学も科学の一部であると主張するのである。

一方、カーと同時期の哲学者カール・ポパーは、このような法則定立的な歴史思想を「ヒストリシズム (historicism)」(「歴史主義」もしくは「歴史法則主義」と訳される) と呼び、批判の俎上に載せた。ヒストリシズムを「歴史的な予測が社会諸科学の主な目的であり、またその目的は歴史の進化の基底に横たわる「リズム」や「パターン」、あるいは「法則」や「傾向」を見出すことによって達成しうると仮定する、社会諸科学に対する一つのアプローチ」[ポパー 1961:18] と規定したうえで、歴史的予測の根拠として役立つような歴史の発展に関する法則的な根拠はありえないと批判した。ポパーはまた、いわゆる史的唯物論の立場から発展段階論という「法則」を見出し、この「法則」を通して共産主義社会という「未来社会」を予見したマルクス主義的な歴史観にも批判の矢を向け、ヘーゲルらとともにマルクスを歴史主義的な思考に陥った思想家として名指しで論駁するのである。

その後のマルクス主義的な発展段階論の退潮は周知のとおりだが、歴史学における社会発展の法則認識もなりを潜め、同時に未来予測も周縁化されていく。いずれにしても、歴史学における未来予測の問題は、部分的にであれ法則定立的方法を受け入れ、歴史的事実の選択に一般法則性を持ち込もうとした時に頭を擡げてくる。冒頭で挙げたアシモフの「心理歴史学」も、歴史を確率論的に法則化するという設定があったからこそ、作中において未来予測がよりリアリティを持ち得たのである。

さらに言えば、歴史系博物館の展示において未来への言及が困難なのは、地域博物館が依拠する地域史研究という学問分野が、一般化や普遍化という方法論とは相容れず、こうした法則的把握を志向していないことと軌を一にしているからともいえるだろう。

(3) 希望・実践・行動

歴史学における未来の問題に関するカーの主張の中で、むしろ本稿の趣旨に照らして重要だと考えられるのは、次の一節である [カー 1962:197]。

未来へ向って進歩するという能力に自信を失った社会は、やがて、過去におけるみずからの進歩にも無関心になってしまうでしょう。

ここでは歴史学の一般法則性ではなく、現在における社会の「自信」、すなわち前向きに希望を持てるような気持ちのあり方を問題にしているという意味で興味深い。確かに、いくら未来に向けて歩もうとしたとしても、未来予測が絶望に直結するようなものだったとしたら、未来に希望がもてず、人類は未来への歩みそのものをやめてしまうかもしれない。

この点に関しては、「希望学」プロジェクトの取り組みとも呼応する。2005年度から東京大学社会科学研究所が始めた同プロジェクトは、経済学、社会学、政治学、法学、歴史学、哲学、人類学など社会科学の視点を駆使して、希望の意味や希望が社会に育まれる条件などを考察する独自の研究であるが [東大社研ほか 2009]、希望を個人の心の次元の間

題であると同時に、社会の次元として捉えるという問題意識を共有するものだった。一人ひとりの抱く個人的な希望がどのように社会的希望と結びついていくのかという道筋、すなわち個人が希望を抱くことが可能になる社会のあり方の構想をも射程に入れていた。カーの言う社会の「自信」、あるいは希望学でいうところの「社会的な希望」が、未来を構想していく上で不可欠な条件であるという点において共通している。

教育学者のパウロ・フレイレは、かつて希望を「人間の存在論的必要条件」と規定した。しかしフレイレの主張の要諦は、希望を「実践」と結びつけているところにある。フレイレは言う [フレイレ 2001:9]。

人間の存在論的必要条件であるとはいえ、希望は、すべからく実践のなかに錨を下ろさねばならぬということである。存在論的必要条件である希望が、歴史のなかで具体化されるためには、実践という媒介が必要なのだ。

希望学プロジェクトにおいては、希望の定義をめぐる議論の中で、“Hope is a Wish for Something to Come True”（希望とは何ごとかを実現しようという願いである）という経済社会学者のリチャード・スウェッドバークの定義に対して、法学者の広渡清吾の提案によって“by Action”（行動によって）を付け加えることになった経緯が明かされているが [玄田 2010:44-45]、このことは、「行動」に結びつくことにより希望が社会的な次元に転化しうることを示している。つまり、希望（Hope）には願い（Wish）だけではなく行動（Action）が不可欠ということだが、フレイレの言葉を借りれば、「たんなる願望のなかには、希望はない。たんに願っているだけでは、願っているその当のものに到達することはできない」ということになる [フレイレ 2001:9]。

翻って、「意見の展示」においてはどうかだったか。入力端末から小さなウィンドウに入力する、あるいは小さな付箋紙に書き込むという物理的制約によって、個人の「行動」や「実践」を十分に表現することは到底望めないし、そもそも未来に向けての「行動」や「実践」は、七夕の短冊のような願いごとをちょっと入力すれば事足りりというような性質のものではないはずだ。「たんなる願望」が書き込まれ、たとえそれが公開・共有されていたとしても、「行動」や「実践」とは無縁であるがゆえに、私的な領域として完結する。まさしく「たんに願っているだけでは、願っているその当のものに到達することはできない」のである。

（４）苦痛を伴う選択

とはいえ、展示というメディアによって「実践」や「行動」を促すというのは、実際にはある意味無謀な話かもしれない。しかし、「現在」は、過去における具体的な選択の無数の積み重ねによって成立しているはずであるし、そう考えれば、「未来」も、現在から先の具体的な選択の集積でしかない。したがって、直接的に「行動」には結びつかないとしても、展示においてこれからの社会を構想していくための無数の現実的な選択肢を具体

的に考える場にはすることはできないか。

たとえば、未来社会における深刻な課題の代表格と考えられる地球温暖化や少子高齢化も、過去における個人的・社会的な「幸福追求」という選択の蓄積の末に引き起こされたものである。とすれば、今後進むべき未来に向けて地球温暖化や少子高齢化を解決していく筋道も、そのような具体的な選択の集積の上に成り立つことになる。過去における快適な生活と引き替えにもたらされたこれらの問題群は、程度の差こそあれ、現在および未来の快適な生活を手放すという選択をしなければ解決しない。しかもその選択は、金銭的、心理的、時間的コストの余計な負担を強いる場合もありうるし、時には苦痛も伴う。そのような苦痛を伴う選択をする覚悟があるかどうかを問うのが、「未来を構想する」ということではないか。少なくとも、ただディスプレイに七夕のような願いごとを書いていけばいいというわけでは決してない。「未来への展望」とは、もっと現実に即した具体的で切実な、われわれ自身の「選択」の問題である。

ただし、ここで注意しなければならないのは、その選択や行為をすべて「個」の問題に還元し、個人に選択・決断の労苦を強いてしまうことの陥穽である。マーガレット・サッチャーの「社会などというものは存在しない。存在するのは個人だけだ」という言葉が象徴するように、昨今の新自由主義においては「頑張った人が報われる社会」を志向する。そしてその結果として、増大する社会的リスクを個人に負担させることを正当化するイデオロギーとしての「自己責任論」に行き着く〔矢野 2011〕。

新自由主義流の自己責任論においては、個人の選択は、成功しても失敗しても徹頭徹尾、個人の領域内で完結させる。しかし問題は、失敗した時、あるいは選択すらできないほど困難な状況にある時、その負担や解決をすべて個人に負わせ、社会的なセーフティネットへの回路を断絶させていることにある。

あくまでも未来への選択は、最終的には社会的な行為としてなされるべきだろう。希望学において「個人が希望を抱くことが可能になる社会のあり方の構想」を目指していたのと同じように、未来を選び取っていくという営みそのものを社会的な行為として共有していけるような社会のあり方こそ必要なかもしれない。

では、苦痛すら伴う未来への具体的な選択を、どのようにすれば社会的な行為と結びつけていけるのか。さらに、それをどのようにして「実践」や「行動」につなげていけるのか。それこそ、すぐれて社会的で公共的な性質をもつ展示というメディアが担うべき重要な課題となるはずだ。

注

- 1 ファウンデーションシリーズは、全7巻が『銀河帝国興亡史』として早川書房から出版されている（創元推理文庫からも『銀河帝国の興亡』として翻訳が出ている）。また、アシモフの死後、別の作者によって続編3巻が『新・銀河帝国興亡史』として発表されている（いずれも早川書房）。なお、作中に登場する「心理歴史学」は、実際の学問分野としても成立しており、精神分析学と密接に関係しフロイトの分析を歴史上の個人や集団へと適用する取り組み〔ウィルソン 2011: 143〕や、子どもの発達研究を歴史学的に捉える試み〔宮盛 2013〕などにも、同一の名称が付けられているが、両者に直接的な関連はない。
- 2 同書はケンブリッジ大学での連続講演をもとにしているため「前の講演」と表現している。
- 3 館名ではなく、博物館の管理運営を担う指定管理者の名称が、「公益財団法人新宿未来創造財団」（新宿歴史博物館の指定管理者）、「公益財団法人とちぎ未来づくり財団」（栃木県子ども総合科学館の指定管理者）、「あだち未来創造ネットワーク」（こども未来創造館の指定管理者）というように「未来」が付いている場合もある。
- 4 ただし、鳥取市歴史博物館の場合は多少複雑である。「未来へのちから」コーナーの中には、「未来のわたしへメッセージ」という展示物があり、コンピューターに名前と生年月日を登録すると、15秒間画像と音声を記録でき、再来館した時に、過去の自分に出会えるという趣向となっている。この場合は、画像と音声を記録した時点では、未来の自分へ伝えるという意味で時制は未来形となるが、次の来館時に聞く時には、過去の自分からメッセージを受け取るという意味で、時制は過去形になる。もっとも、過去の自分の声を聞いたところで、「未来へのちから」となるかどうかはよく分からない。
- 5 山梨県立博物館ホームページ http://www.museum.pref.yamanashi.jp/3nd_event_11mirai_1.htm (2015年9月22日閲覧)
- 6 山口 [2009:61] およびオリエンタルランド [2015:9-10] に基づく。なお、慣れや飽きによって低下した楽しさの心理量を回復する取り組みを、ディズニーランドでは「リハビリテーション」と呼び、この「リハビリテーション」の考え方が絶え間ないアトラクションの入れ替え行為を支えている [山口 2009:62-63]。

文献

- 有馬哲夫 2011 『ディズニーランドの秘密』新潮社
- 石村源生 2008 「AAAS2008年次大会における北海道大学のブース出展について」『科学技術コミュニケーション』4(1)
- N. J. ウィルソン 2011 『歴史学の未来へ』法政大学出版局
- オリエンタルランド 2015 『FACT BOOK 2015』
- E. H. カー 1962 『歴史とは何か』（清水幾太郎訳）岩波書店
- E. H. カー 1998 『カール・マルクス——その生涯と思想の形成』（石上良平訳）未来社
- 金子 淳 2008 「博物館の「危機」と歴史展示——懐かし系／ロマン系展示から見る歴史系博物館の課題」『歴史学研究』838
- 金子 淳 2009 「象徴天皇制の磁場に生まれた“夢の空間”——中央児童厚生施設「こどもの国」の設立過程から」『静岡大学生涯学習教育研究』11
- 金子 淳 2011 「公开展示という沈黙——四日市公害の記憶とその表象をめぐって」『静岡大学生涯学習教育研究』13
- D. キャンダイン編 2005 『いま歴史とは何か』（平田雅博ほか訳）ミネルヴァ書房
- 玄田有史 2010 『希望のつくり方』岩波書店
- 櫻井文字 2015 「インドの博物館に見る歴史的展示空間の残存——コルカタとパトナを例に」『専修大学人文科学研究年報』275

- 塩川伸明 2007 『《20世紀史》を考える』 勁草書房
- 塩川伸明 2010 「現代史における時間感覚——事件・歴史家・読者の間の対話における距離感」
中部大学総合学術研究院『アリーナ』10
- TEPIA 先端技術館 2015 『TEPIA 先端技術館平成 27 年度展示ガイドブック』
- 東大社研・玄田有史・宇野重規 2009 『希望学 1 希望を語る——社会科学の新たな地平へ』 東京
大学出版会
- 中島弘二 1999 「「天皇の森」から「県民の森」へ——1960～1970 年代の国土緑化運動における「自
然」と「ネーション」」『金沢大学文学部地理学報告』9
- P. フレイレ 2001 『希望の教育学』（里見実訳） 太郎次郎社
- K. R. ポパー 1961 『歴史主義の貧困』（久野収・市井三郎訳） 中央公論社
- 宮盛邦友 2013 「教育理念としての〈子どもと発達〉理解——「子ども期と子ども観」研究の序論
的考察」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』119
- 矢野修一 2011 「「まだない」ものに向き合う社会科学——ポシビリズムと希望学の対話」 法政大
学経済学部学会『経済志林』78 (4)
- 山口有次 2009 『ディズニーランドの空間科学——夢と魔法の王国のつくり方』 学文社

付記

本稿は、2014～2016 年度科学研究費補助金基盤研究(c)「博物館における「負の記憶」の展示表
象とその成立プロセスに関する実証的研究」（課題番号：26503011）による研究成果の一部である。

